

# 見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち



July						
S	M	T	W	T	F	S
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

July 2023 vol.111

## ◆ だいじしんりょうかわくちつなみき 大地震両川口津浪記

所在地：大阪府大阪市浪速区幸町

交通：JR大阪環状線「大正」駅北東約300m

今月は関西方面へ少し遠出をします。大阪市北部を流れる大川（旧淀川）は、かつて九条島がその河口をふさぐ形で流れを妨げており、加えて、河口周辺で複数の支川が流れ込むため、川底に土砂が堆積しやすく、たびたび洪水を引き起こしていました。また、川底に堆積した土砂は舟運の妨げにもなっていました。貞享元（1684）年、治水の幕命を受けた河村瑞賢は、九条島に直線の川筋を通しました。数年の後、安治川（淀川を安らげく治める川であれかし）と名付けられたこの川の開削により、すでに整備されていた九条島の北を通る「西廻り航路」の船も安治川を通行するようになり、木津川とともに大阪湾へ注ぐ当時の淀川の河口一帯は「両川口」と称され、商都大坂の玄関口として「出船千艘・入船千艘」の賑わいを見せました。

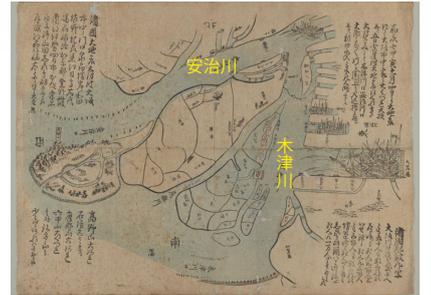
また、江戸時代には、多数の堀川（運河）が上町台地の西側に開削され、「浪華八百八橋」と称されるほどの橋が架けられました。実際には多い時期でも200に満たない程度でしたが、幕府が維持管理する公儀橋は12で、ほとんどは豪商や町民たちが自費で架けた橋でした。

江戸末期の嘉永7年、11月4日（1854年12月23日）に発生した安政東海地震に続き、翌5日に安政南海地震が発生、地震により引き起こされた津波が大坂市中へ到達しました。被害の様子はかわら版などに数多く残されています。

地震の翌年、安政2年7月には、犠牲者の追善供養のため、木津川の渡し船の乗り場に「大地震両川口津浪記」が建立

されました。この碑は、住民らにより建てられた高さ約1.9mの四角柱型の石碑で、被害の様子や建立経緯が2面に隙間なく刻まれています。以下、碑文の内容です。

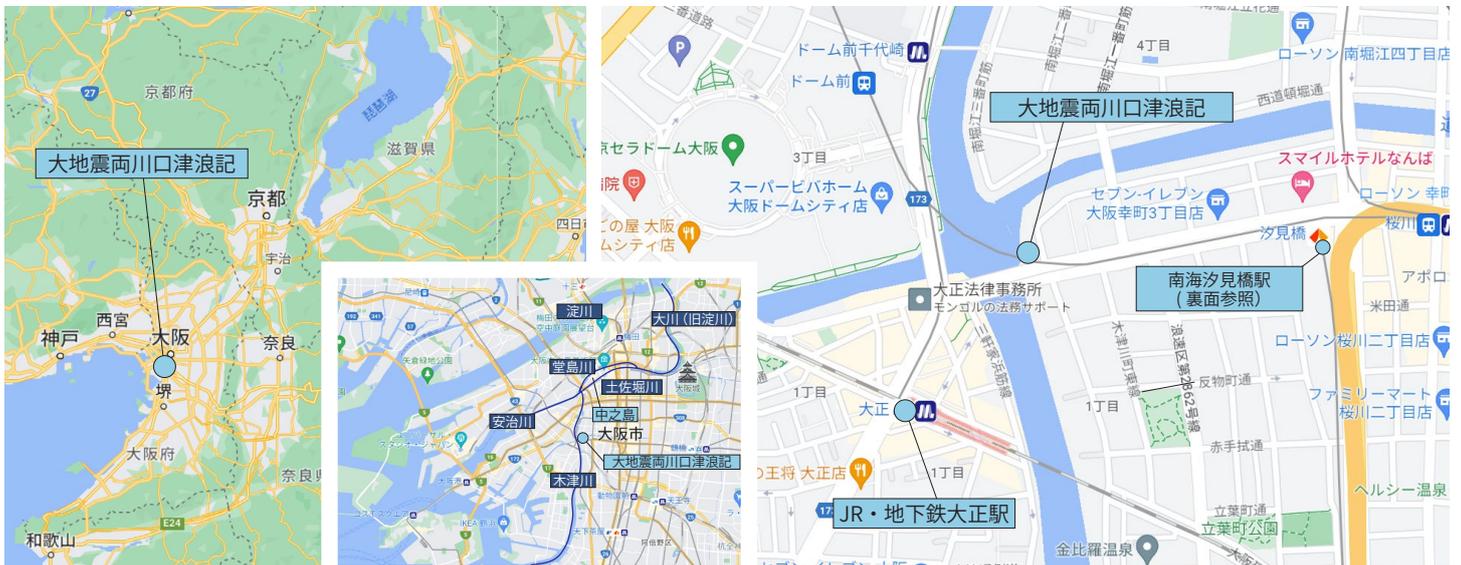
『嘉永7年6月14日子刻頃大地震（安政伊賀上野地震）、余震を4～5日恐れた。11月4日辰刻（朝）大地震、以前から（建物の倒壊を）恐れていた人々は、空き地に仮小屋を建てたり、堀川の小船でやりすごしていた。翌5日申刻（夕方）再び大地震があり、日暮れ頃に雷のような轟音とともに津波が押し寄せた。安治川と木津川は特に激しく、山のような大浪が立った。両川筋に係留する船は碇綱が切れ、（津波の遡上によって）上流へ流されて橋へぶつかり、多くの橋が崩落した。大通りへあふれる水に慌て逃げまどい、これらの橋から落ちた人もいた。安治川橋、亀井橋、高橋、水分、黒金、日吉、汐見、幸、住吉、金屋橋等ことごとく崩れ落ちた。（道頓堀川に架かる）大黒橋へは、大型の船が横付けになり、川が堰き止められたので、川下から流された船が次々に乗り上がって、瞬く間に山のようなになった。川沿いの掛造りの納屋などは、大船が押し崩し、その音



被害絵図（個人蔵・減災館寄託）



大地震両川口津浪記



◆ 災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。





と人々の悲鳴はあっという間のことだったので、助けることができなかつた。水死人、怪我人はたちまち夥しい数にのぼり、船場や島之内までも津浪が来る、と上町（東方の内陸高台）へ逃げゆく様子も慌ただしかった。

148年前の宝永4（1707）年10月4日の大地震（宝永地震）の際も、小船に乗っていたため、津波により溺死した人が多かったそうだ。年月を隔てて、このことを伝え聞いて知る人が極めてまれとなったため、今回、同じ場所で多くの死者を出してしまった。いたま敷（痛ましき）事限なし。後年、また同じことが起きるかもしれない。

大地震の際は津波が必ず起こることを常々心得て、決して船に乗ってはいけない。家が崩れて火災も起きるので、金銀・証書類は揺れにも火災にも強い蔵へ収めておき、火の用心も重要である。河川の船はその大きさに応じて水の勢いが穏やかな場所へつなぎかえること。囲い船（使っていない船）は早いうちに高い場所へ上げて用心すること。

このような津波は沖から押し寄せるばかりではない。海辺近くの海底や、川底などからも吹き湧く。海辺の新田・

田畑にも泥水が大量に吹き上がる。今回、大和の古市は池の水があふれて、人・家が多く流れたこともこの類なれば、海辺、大河川、大池周辺の住人は用心が必要である。水の勢いも通常の高汐とは異なる（極めて速い）ことも、今回、経験した人はよく知ることになったが、後世の人々の心得と、溺死者追善のため、ありのまま拙文にて記し置く。』

石碑には、宝永地震による津波の悲劇を知る人が極めて少なくなったことで、当時と同じ場所で同じ被害を繰り返してしまった悔しさ、後年いずれ再び発生するであろう大地震の際の心得などが記され、「願くハ心あらん人年々文字読みやすきやう墨を入給ふべし」と、地震による被害と教訓を後世へ継承する願いで締めくくられています。

大正4(1915)年、大正橋が架けられたことに伴い、碑は橋の東詰北側に移設されました。石碑に刻まれた願いに代えて、いまもなお、地域の住民たちが碑文を墨汁でなぞり、常に読みやすく保つとともに、毎年法要が営まれています。



## ★ 天神祭

天神祭は菅原道真の命日にちなんだ縁日で、7月25日前後に各地の天満宮で開催されます。中でも千年以上の歴史をもつ大阪天満宮の天神祭は、京都の祇園祭、東京の神田祭とともに日本三大祭の一つとされます。



6月下旬から様々な行事が行われますが、7月24日の宵宮、25日の本宮でクライマックスを迎えます。25日は、約3,000人が参加する大行列「陸渡御」、神輿を乗せた奉安船や催太鼓船など様々な船が大川（旧淀川）を行き交い水上で舞踊や能を披露する「船渡御」などが行われ、夜には100隻の大船団のかがり火と、約5,000発の奉納花火があがります。

大川に映るかがり火や提灯の灯り、花火などの華麗な姿から、火と水の祭典とも呼ばれています。

## ～鉄道で巡る～

南海なんば駅から高野山方面を結ぶ南海高野線の支線に、都会ながら少し寂れた沿線風景が広がる路線、通称・汐見橋線があります。なんば駅から高野山方面へ5駅、約6分の岸里玉出駅から、北西の都心方面へ汐見橋駅まで延びる、6駅、約10分の路線です。



レトロな駅舎や古びた設え、懐かしい雰囲気のある商店街など、「都会のローカル線」の趣を感じることができます。

## ●ブレイクタイム●

### ♪ 津波・高潮ステーション

大阪市西区にある津波・高潮ステーションは、平常時は津波・高潮災害に関する啓発拠点、津波・高潮が発生した際には西大阪地域の防災拠点となる施設です。映像シアターや模型で高潮や津波への知識と防災対応を学ぶことができる「展示棟」と、防潮堤などの一元管理を行う「防災棟」があります。「大地震両川口津浪記」碑や、堺市内に建つ「擁護壘」碑の模型もあり、安政南海地震・津波における両地域の住民対応を比較することができます。



津波・高潮ステーション HP より

◆この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、[gensaisan2014@gmail.com](mailto:gensaisan2014@gmail.com) まで情報をお寄せください。

◆この地域の歴史災害記録をオンラインツアー形式、マップ形式で紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『災とSeeing』のホームページ (<https://www.saitoseeing2020.jp/>) をぜひご覧ください。

(発行：減齋の会・名古屋大学減災連携研究センター 2023年7月)

